
関西社会学会のあゆみ

第26回大会(1975年)～第50回大会(1999年)

——創立50周年を記念して——

関西社会学会 編

目 次

50周年を記念して	宝月 誠	1
第50回大会記念シンポジウムの記録		
《総合シンポジウム 社会学の応用可能性——社会学に何ができるのか——》		
第1報告 社会学とジェンダーポリティックス	伊藤公雄	5
第2報告 環境からみた社会学の応用可能性	鳥越皓之	24
第3報告 青少年対策と青少年（問題）の変質	徳岡秀雄	38
《ミニシンポジウム》		
第1部会 社会学は「役に立つ」か？ ——犯罪・社会問題の経験的研究を通して考える——	鮎川 潤	48
第2部会 ディシプリンとしての社会学 ——そのアイデンティティとキャパシティ——	大野道邦	56
第3部会 臨床のことばと学(術)のことば	大村英昭	64
第4部会 知の考現学としての可能性	高坂健次	72
第26回～第50回大会の記録		
第26回大会 (1975年 関西学院大学)		83
第27回大会 (1976年 追手門学院大学)		87

第28回大会	(1977年 大阪市立大学)	90
第29回大会	(1978年 佛教大学)	94
第30回大会	(1979年 富山大学)	98
第31回大会	(1980年 大谷大学)	103
第32回大会	(1981年 甲南女子大学)	108
第33回大会	(1982年 愛知大学)	113
第34回大会	(1983年 京都大学)	118
第35回大会	(1984年 奈良女子大学)	123
第36回大会	(1985年 金沢大学)	128
第37回大会	(1986年 同志社大学)	133
第38回大会	(1987年 愛知県立大学)	138
第39回大会	(1988年 立命館大学)	143
第40回大会	(1989年 龍谷大学)	148
第41回大会	(1990年 関西学院大学)	153
第42回大会	(1991年 神戸大学)	158
第43回大会	(1992年 奈良大学)	163
第44回大会	(1993年 椋山女学園大学)	169
第45回大会	(1994年 大阪大学)	174
第46回大会	(1995年 大阪府立大学)	179
第47回大会	(1996年 吉備国際大学)	182
第48回大会	(1997年 金城学院大学)	188
第49回大会	(1998年 甲南大学)	192
第50回大会	(1999年 関西大学)	201

編集あとがき

211



50周年を記念して

関西社会学会会長 宝月 誠

関西社会学会も50周年の記念すべき大会を無事に終え、新たな飛躍に向けて一步踏み出したところです。このめでたい節目を祝して、50回大会ではさまざまなテーマのシンポジウムを開催致しました。20世紀の関西社会学会の総括と21世紀への展望を込めて行われたものですが、お陰様でいずれのシンポジウムも盛会でした。

本冊子はそのときの報告の要旨と26回大会から50回大会までの各年の研究報告の題目と報告者をまとめて編集したものです。25回大会までの研究報告題目は「関西社会学会のあゆみ」として、ご存じの方も方も多いことと思いますが、25回大会のときに先輩たちのご尽力で編集・出版されております。今回の冊子は基本的にそれを継承したものです。両方の冊子をお目通し頂ければ、関西社会学会の50年のあゆみを一望できることと思います。21世紀にはこうした活字メディアではなくて、電子メディアでの情報の蓄積・伝達も一般化することを考えれば、こうした冊子もおそらく最後のものになるのかもしれませんが。活字文化の20世紀の遺産として、この半世紀の記録は将来、貴重な資料として活用されることを願っております。

さて、学会の半世紀を振り返ってみたとき、まずその会員数の増大に驚かされます。ごく少数の大先輩の先生方の内輪の研究サークル的な雰囲気の中からは立ちあげられた学会が、現在では800名を超える会員を擁するまでに成長し、地域学会であるにもかかわらず、会員は関西地域だけでなく日本各地に散らばっておられます。単にこうした量的な拡大だけではなく、大会での研究報告も活発化しており、若手の研究者や大学院生にとっては本学会での報告は、学界へのデビューを飾る最初の検舞台となっております。また、中堅以上の研究者層にとりましても、シンポジウムや研究発表はその時代の社会学の関心や動向を知る上で貴重な機会を提供し、また旧知の人との親好を暖めさらに新しい知己を得る交流の場としても機能してきたことと思います。

本冊子に収められております四半世紀分の研究報告のテーマを通覧されますならば、そこからいろいろな意味を読み取ることが可能かと思えます。理論の分野ではデュルケームやヴェーバーの古典への関心はある程度持続されておりますが、機能主義から現象学的社会学やミクロ社会学へ、さらにはハーバーマス、フーコー、ルーマン、ブルデューなどの

流行といった具合に、理論の関心はめまぐるしく変化しております。経験的な分野では、さすがにその時代の問題（e.g. 災害や地域社会問題）を反映したテーマが含まれておりますが、近年は趣味に近いテーマとか自らの生活経験に関連したイシューなど実に多様なものが取り上げられる傾向を示しています。文化社会学的な事柄への関心や社会史、さらに一昔前ならば研究テーマとしてはばかられたような身近かな事柄もテーマになっております。こうしたことは社会学の「成熟」の証、といえないこともないのかもしれませんが。

もちろん、こうした変化は表面的な現象にしかすぎないともいえます。そこに通底するものをどのように読み取るかは、各自によって異なってきます。ポスト・モダンに染まった人は、社会学的な「知」の累積や積み上げを素朴に信奉できないにしても、諸理論との対話・対決・交渉さらに経験的世界と理論の交流を通じて、学会も「社会的世界」と同様に生成していくものと考えることができます。ひとつの「社会的世界」としての学会がどれだけ活性化するかは、その世界に参加する人々の知的な活動だけでなく、さらに慣習・資源（特に技術）・組織などによっても左右されます。今後は会員相互の討議の強化とともにこれらの要素の点検を通じて、関西社会学会が21世紀にさらに一段と活性化し、新たな「知」を生み出すことを願っております。

なお最後に、50回大会の開催に際して、また冊子の編集に当たって、それぞれご尽力頂きました方々に厚くお礼を申し上げます。

第 50 回大会記念シンポジウムの記録



社会学とジェンダーポリティックス

伊藤公雄（大阪大学）

はじめに

1960年代の第2波フェミニズムの登場以後、国際的にも、また日本国内においても、ジェンダーに関する政治の動きが活発化している。しかし、それは多くの場合、ウィーメンズ・イシューをめぐる課題に重きを置く形で展開してきた。1975年メキシコシティで開催された国際女性（婦人）年世界会議での「世界行動計画」採択以後、1979年の女性差別撤廃条約の国連総会での採択、コペンハーゲン（80年）、ナイロビ（85年）、北京（95年）、さらには2000年ニューヨークで開催の国連特別総会2000年会議と、相次ぐ世界女性会議での「将来戦略」「行動綱領」採択など、女性差別撤廃の動きは、20世紀後半における大きな国際的政治課題としてあった（あり続けている）といえるだろう。

ここでいう女性差別とは何か。「女性差別撤廃条約」は、性差別について、以下のように簡潔に定義している。

「女性に対する差別とは、性に基づく区別、排除または制限であって、政治的、経済的、社会的、文化的、市民的その他のいかなる分野においても、女性（婚姻をしているかいないかを問わない）が、男女の平等を基礎として人権および基本的自由を認識し、享有しまたは行使することを害しまたは無効にする効果または目的を有するものとする」（第一条）。

こうした女性の人権の確立をめぐる動きと平行するなかで、女性学（ウィーメンズ・スタディーズ）もまた、大きく発展してきた。女性学は、これまでの男性を基準として選択され、定義されてきた社会的・政治的・文化的な現象を、女性という新たな視点からとらえ返すことを要求した。これまで「瑣末な問題」「周縁的な課題」として十分に光を当てられなかった女性という視点に立ったこの新たな研究スタイルは、これまで「自明」とされてきた事柄の背後にひそむ性によるヒエラルキーや、「男性支配」によって隠蔽されてきたさまざまな事柄を、新たな文脈から位置づけ直すことに成功した。その衝撃力は、人文・社会科学のみならず自然科学に対しても一種のパラダイム転換を生み出すとともに、これまでの男性中心のアカデミズムのあり方そのものを揺り動かすことにもなった。たとえば、女性学の誕生の

地であるアメリカ合州国では、1980年の段階で、全米で約3万の女性学のコースが存在したといわれるほどである。

と同時に、特に1990年代に入って以後、ウィーメンズ・イシューの政策課題としての浮上やウィーメンズ・スタディーズの発展に、共感ないし反発する形で、男性を研究対象とする研究も大きく広がろうとしている。男性というジェンダーからの歴史や社会の見直しという作業である。女性という視点は、確かに、これまでの歴史のなかで欠落して来た問題を、議論の上に上げることに成功した。それならば、これまで「人間=男」として描かれて来た歴史を、一般的な「人間」としてではなく、「男性」というジェンダーに縛られた性に焦点を絞り直すことで、新たな発見が得られるのではない。こうした発想が生まれるのは必然だっただろう。この視点は、今や、国際的にも共有されつつある。「女性性=〈女らしさ〉」という視点からの考察が、社会学、文学、歴史学、美学、政治学、思想史から自然科学史にいたる広範な分野で新たなパースペクティブを作り出したように、「男性性=〈男らしさ〉」というもうひとつのジェンダーの視点からの研究もまた、1990年を前後して、多くの研究業績を誕生させつつある（伊藤 1993、1996 など）。

実際、欧米のアカデミック・ジャーナルにある程度継続的に目を通して人なら、90年代中期以後、タイトルに masculinities という語を含む研究論文が、急増していることに気がついてははずだ。これまで人間=男性という暗黙の視点によって切り取られてきた近代諸科学は、女性学・フェミニスト研究の登場によって多くのパラダイム革新を求められることになった。その動きは、必然的に、人間一般としての男性ではなく、男性というジェンダーによって拘束された存在としての男たちについての研究という新たな視座を生み出しつつあるのだ。「メンズ・イシュー」、「メンズ・スタディーズ」の登場である。男性学・男性性研究を授業科目とする大学も登場しつつある。アメリカ合州国では、すでに1984年の段階で、全米で40の講座が開かれていたという。90年代に入ると、授業科目としての男性学は急増し、1992年には、全米で400講座までの広がりを見せている（フェミアノ、1992）。アカデミック・ジャーナルの領域においても、1998年には Sage 社から men&masculinities が出版されるなど、男性学・男性性研究の広がりが見えつつある。

また、80年代に入って以後、ゲイ・ムーブメントに代表される流れもまた、国際的な課題として登場してきた事を忘れてはならないだろう。この流れは、インターセックスの人々のかかえる課題やトランスジェンダーの人々の動きと合流し、今や、「クィア・イシュー」という形で議論されることも増えてきた。それに対応するように、「クィア・スタディーズ」

もまた発展しつつある。

こうして、当初、ウィーメンズ・イシュー中心に発展してきた性・性別をめぐる諸課題およびそれをめぐる考察の作業が、世紀の転換点において、ジェンダー・イシュー、それに対応したジェンダー・スタディーズという形で新たな広がりをもとうとしているのである。

1 ジェンダー化された社会としての近代社会

こうしたジェンダー・イシューの急浮上の背景には、明らかに、近代社会の作り出したジェンダーの枠組みのゆらぎが存在していると思われる。

近代産業社会は、男女の二項図式をそれ以前の社会以上に強調する社会、いわばジェンダー化された社会であったといえる。もちろん、前近代社会においても、明らかに男女の二項図式は存在していた。しかも、こうしたジェンダーの構図は、人々の日常意識から宗教的世界観までをふくむあらゆる世界像の内に深く根をおろしていたと考えられる。たとえば、現在でもナバホ・インディアンの人々の間では、昼＝女性、夜＝男性、黄色＝女性、白＝男性といったかたちで、世界を男女に二分割するような宇宙像が存在しているといわれる（青木、1986など参照）。もちろん、この男女の分割は、地域によって異なる。たとえば、によれば、北アフリカのカビル族では、昼は男性の領域であり、夜が女性に割り当てられている（ブルデュー、1990など参照）。同様のことは、東洋文化における、陰＝女性、陽＝男性という二分法をもつ陰陽図式にもみられる（クリステヴァ 1981 など参照）。いずれにしても、伝統社会においては、男女それぞれの役割が固定されるとともに、男女双方の相互に補完的な関係によって世界の秩序が保たれてきたのだ（そのことはおそらく、西欧社会においても同様であっただろう。男性名詞・女性名詞の存在は、明らかにその名残といえるだろう）。

近代化以前の多くの文化においても、男性優位の傾向が強いのは事実である。しかし、前近代社会では、男女の相互補完的な関係性が強調されることで、男女の役割は、安定した関係を維持することができていたともいえる。つまり、男女関係そのものが、共有された世界像の内に構造化されることで固定化され安定した状態におかれてきたのだ。そこでは、いずれか片方が欠如することは、世界の安定性を揺るがせるがゆえに、男女の役割領域が高い独立性をもって保持されていた。と同時に、生活のためには相互の協力が不可欠であり、それゆえ、男女の力関係もまた、一定の「対等性」が維持されることになったと考えられる。

しかし、近代社会の登場は、共有された世界像に支えられた安定した共同体社会（差別が

固定化・構造化されることで安定した会)を食い破り、それなりに安定していた男女の相互補完関係を崩壊させることになった。トマス・ラカーは、この変化を「ワンセックス・モデルからツーセックス・モデルへの変換」ととらえている。つまり、「人間を一種類の基本的型に属するものとして、男女の性差を種類ではなく程度の違いと考える思考枠」から、男女の生物学的性差をそれまでになく強調する方向へと、人間の認識の仕方が変化したのである。確かに、伝統社会においては、男女の二項図式は文化的・社会的に強調されていた。世界像そのものが、男女という区分けのなかで把握されていたのだ。しかし、この二項図式は、生物学的な存在としてのオス、メスの対立についてはあまり配慮がなされていなかった。むしろ、身体的には男女ともきわめて相同性が高いものとして認識されていたのだとラカーはいう。つまり「男性、あるいは女性であるということは、社会において特定の地位を占め、特定の文化的な役割を担うことであって、生物として二つの本質的に異なる性のいずれかとして存在することでは」(ラカー、1998年)なかったのだ。

近代社会の登場とともに広がった、男女の生物学的性差の強調は、当然のことながら、男性・女性をめぐる認識、男女の生活の仕方、身体技法におけるそれまでになかった変容を生み出すことになった。簡単にいえば、それまでは個々人の差として認識されていたものまでが、男女という生物学的な根拠をもとに認識されるようになったのである。この視点を、スコットやバトラーが提起したように、セックスがジェンダーを規定するのではなく、個々の多様性を男女という二項図式に強制的に分割するジェンダーの認識こそが、セックスの強調を作り出した、といいかえることもできるだろう(バトラー 1999、スコット 1992 など参照)。近代社会は、前近代社会以上に生物学的な男女の二分割に過剰に意識的な社会なのだ。そこでは、女性たちは、しばしば男性と比べて、本質的・先天的に劣る存在として認識された。同時に、この「弱き性」である女性たちは、社会の主要な担い手としてではなく、あくまで男性の庇護の元にある存在であることが求められたのである。

こうして、近代産業社会の登場は、それまで地域の特徴をもちつつ、同時に、コスモロジカルな二項対立の図式をもち続けてきた男と女の関係(イリイチ風に「バナキュラーなジェンダー」構造と呼んでもいいかもしれない)を、地球規模で同じ方向に水路づけることになったのである(イリイチ 1983)。その方向は、基本的には、男性は「生産労働=『公的』労働=有償労働」を、女性には「(家事・育児・介護など、現在・未来・過去を貫通する労働力のケア労働としての)再生産労働=『私的』労働=無償労働」という傾向をもっていた。そして、このジェンダーによる新たな分業構造は、明らかにそれまでそれなりに保持されてき